ジョーイ・ラモーン

◎42歳女性
◎バー経営
◎神奈川県出身

中2で夜遊びを覚える。高校時代はバンドブームど真ん中だったため、迷わずバンギャの道へ。そしてそのまま売り子になる。わらしべ長者のように様々な繋がりが生まれ、演劇映画現代美術の裏方に。DJだったりもした。その後、とあるお偉いさんの理不尽さに啖呵を切り、裏方仕事を干される。サブカル系本屋店員・雑貨屋店員・こども電話相談室の中の人を経て、新宿御苑近くの小さなバーの2代目ママとなって、現在4年目。

記憶をさかのぼれば3歳のときに母親の浮気が原因で両親が離婚。母親に引き取られるが、浮気相手との暮らしを優先され、シスターのいる施設に預けられる。そこにいたお兄さんお姉さん達から、アイドル以外の音楽や、テレビ以外のカルチャーを教わる。なので、たいへんにませたガキだった。

中学生になる時点で母親に引き取られるが、すでにませていたので夜遊びもデビュー。ディスコも行っていたが、ライブハウス通いがこのあたりから始まった。

初めてのライブハウスは新宿アンティノック。カツアゲされても帰れるように、靴

の中に千円札を敷いて行った。そのときに出会ったずっと年上のパンクスの皆様に、可愛がってもらうようになる。

高校生になったあるとき、クラッシュ、シャム69、ラモーンズの3日連続ライブが開催されることになり、会場のクラブチッタ川崎で売る分をパンクス連中で買い占める。当日は開場したらすぐに全員がライブTシャツを買って、その場で着替えてお揃いに。そして最前列に文字どおり雁首揃えて大暴れ。アンコールは手拍子でなく、それぞれのバンドの歌を合唱して呼び込もうと計画。会場の他のお客様も巻き込まれてくれて、大成功をおさめる。

金土日の開催だったので、当然、初日からず〜っと飲んだくれる。アルコール以外の水分は、富士そばのつゆかラーメンのスープ。そんなベロベロの中、3日目のラモーンズの日がやってきた。しかもこの日は私の誕生日。パンクスの中でいちばんおっかない兄貴分が、「誕生日プレゼントに、俺の整理番号1番と交換してやる」と言ってくれて、ラモーンズの夜は1番で入場、最前列ど真ん中に陣取る。

1曲目がなんだったのか忘れたが、とにかく大はしゃぎでモッシュ、ダイブを連発。疲れも酔いもピークで、何が何だかわからないハイテンション。4曲目あたりでダイブしたら、鋲がビシッと打たれたライダース着用のお兄さんに直撃してしまい、アゴをパックリ切る。しかし本人はどうかしていたので、まったく痛みを感じず、気づかないまま着地失敗……と思いながら起き上がり、ステージのジョーイ・ラモーンを見上げたら、ジョーイが真っ青な顔に。同時に英語でエマージェンシーとか、ブラッドとか叫び、一瞬だけ客電が点いた。隣にいた友達に「アゴ…アゴ……!!!」と指さされ、ン?と思ってアゴを触ると、見事に切れて流血。え!?と思って顔を上げたら、ステージからジョーイが手を伸ばしてくれ、その手を掴んでステージに上がり、他のメンバーに頭下げながらソデに引っ込んで、待機していた救急車に乗車。

救急隊も、病院のスタッフも呆れるくらい酒臭かったので、麻酔は使えませんと言われる。が、やはり本人はどうかしてたので、5針縫ったがまったく痛くない。むしろ、悪いと思って痛い顔や声を演技したくらい。

治療が終わって、チッタのスタッフとタクシーに乗ったら、「帰宅されますよね?」と聞かれたので、「私の整理番号は1番なんだよ! この気持ちバカにしないでくれよ!」と騒ぎ、運転手の肩を掴んで「とりあえずチッタ行ってくれよ! 頼む!」と懇願(恫喝)。チッタに着いた瞬間、同乗のスタッフが領収書を書いてもらっている間にドアを勝手に開け、全速力で会場に走り込む。

だってラモーンズは曲が短いから! すぐ終わっちゃうから!

包帯ぐるぐる巻きの頭で後ろから突っ込んでいき、途中の柵もくぐって最前列に復帰。巻いてた包帯は、その時点ですでに外れていた。そこで、いつも肩車してくれるガッチリした男子に肩車してもらって、戻ってきたぜー!と両手を広げてアピール。ジョーイが指さして大笑い。

それが本編最後の曲で、メンバーはいちど楽屋に引っ込んだ。前列を買い占めたパンクス連中で、アンコールの呼び込みに歌ったのはリリースされたばかりのモーターヘッドの『R.A.M.O.N.E.S.』。私は肩車されたまま歌った。そしたら出てきたメンバーが、アンコール1曲目にこの歌を演奏してくれた。

その後、ジョーイが肩車されてる私を指さした。「ここにパンクベイビーがいる。エキサイトし過ぎて運ばれちゃったパンクベイビー。ベイビーがいない時にやった『Rock’n’roll radio』をもう一度やってもいいかい?」とMC。会場大盛上がり。当然私も大盛上がり。

あの印象的なドラムが鳴り始めた瞬間、ジョーイがTシャツを脱いだ。そして私の目の前に差し出してくれた。私は頭が真っ白になったけど、これは応えるしかない！と強烈に思い、咄嗟に自分もTシャツを脱ぐ。ブラ1枚の姿でジョーイからTシャツを受取る。ジョーイは私のアゴの血で汚れたTシャツを着てくれた。サッカーのユニフォーム交換みたいに、2人で左胸を叩いてお互いを指さして笑った。

あのときに私は、パンクスでいることが決まったんだと思う。このTシャツ、パンクとはほど遠い絵柄だから、たまに忘れて、なんだこれ?って思ったりもするけれど、タンスの奥からこのTシャツが出てくるたびに、あのときの自分や、いまもジョーイに恥じないパンクスでいるかどうかを省みる。アゴの傷も、まだ残ってる。

私にはなんにもないけれど、この傷とこのTシャツがあるから、ずっと最高だと言い切れる。ほんとに捨てられないTシャツ。